ることによって救はれる」との、浄土門の仏教はいかにして発生したであろうか。自己啓培による解脱の道を説く仏教と、神の創造と支配の信仰による救済の道を説く、キリスト教との特異性は対照的である。この特異性の中で、浄土仏教とキリスト教との類似性についても著者は適切な解明をなしている。本編は八章九章「仏教における信（1）（2）、十章十一章「キリスト教における信仰（1）（2）、十二章から十四章に亘って「キリスト教における信仰と浄土門における信仰について」（1）（2）（3）となっている。

第四編は「実践論」であり、ここにも、この二つの宗教は「私は何を為すべきであるか」との問いにつき、いかに教えるであろうか、と副題がつけられている。この問いへの解明として、十五章十六章「宗教的実践と世間的道徳（1）（2）十七章「慈悲と愛について」、十八章「汝をして人と異ならしむるものは何ぞ」が、それぞそ論ぜられている。ここでも著者は、キリスト教と仏教との類似と相異とを明確に論じている。特に筆者は、「慈悲と愛について」は教えられるところが多かった。

（東京青山書院発行、菊版三〇八頁、定価三五〇円）

Theories of Education

An Introduction to the Foundetions of Education
Harper & Row, publishers, N. Y., 1963 521 pp $ 6.50
by John P. Wynne, Ph. D., (co lumbia uni).

教育学における諸学

― 教育学の基礎入門書 ―

荒井貞雄

著者、ワイネ博士は、かっては公立学校の教師、校長であったが、のちにVirginia の小さな Longwood 大学の哲学、教育学科の長を三〇年以上つとめた人で、現在は名誉教授である。この間、全米または東部地域の哲学、教育学会で広く活躍した学究の徒でもあり、また実践家でもあった。一九四七年にPrentice-Hall から刊行された「教育哲学」を含めて九冊の教育書がある。いづれも斯界では非常に高く評価されている労作である。

この本は E. E. Bayles が編者となって出している Harper's Series on Teaching の一冊である。著者はその序文で、各章ごとに妥当な学者の検閲を乞い、その助言を快くうけ、慎重にその正確さと実践性とを期したと述べ、多くの学者をあげて、謝意を表している。その内容を吟味してみると著者の言葉の真実性がよく理解できる。

著者は二つのはっきりした目的を堅持して全体をすすめている。その一つは先哲によって展開された多くの教育学説が、現代誤って解釈されているので、その問題点を明確にすること。他の一つは、最近、教育学の基礎、例えば、教育史、心理学、哲学、社会学的基盤等、に対する自然科学者群の圧迫、論議、挑戦に関連しての応答、対処である。

第一の目的を果すために、著者は極めて忠実に、各々の学説提唱者の素材について克明に再吟味を試みる、と同時に、最近のその学説についての研究結果の分析を科学的に進めている。第二の目的のためには、多くの学説を、なかば、歴史的順に整え、哲学的心理学的基礎、実践的関連性、および、文化教養的背景の立場からの分析を試みている。

各章四節からなり、その一、二節では、主として学説そのものを扱い、その三節では歴史上からみた文化的評価、その四節においては結論的注解を、注意深く試みている。章の終りにその学説提案者およびその支持者の原著書、文献等を列記し、そのうちのあるものは常々効果的に引用され、読者に親切に整理されている。また、書物の末尾に二段抜き五頁に亘り索引が用意されている。

著者がとりあげている学説は十二で次の如きものである。

一、形式訓練説（The Formal-Discipline Theory）
二、自然完成説（The Natural-perfection Theory）
三、知覚説（The Apperception Theory）

四、習慣形成説（The Habit-Tendency Theory）
五、人間的欲求説（The Human-wants Theory）
六、一般的成長説（The Universal-Growth Theory）
七、新実験主義説（The Later Experimentalist Theory）
八、精神的自己実現説（The Spiritual-Self-Realization Theory）
九、超自然的発達説（The Supernatural-Development Theory）
十、大古典主義説（The Great-Classic Theory）
十一、社会的自己実現説（The Social-Self-Realization Theory）
十二、基礎教科説（The Basic-Subjects Theory）

アメリカの教育は二十世紀の初めにDeweyが、あらわれて以来、いわゆる進歩主義理論派に依って風びされた観があった。そこでは、学習者の経験と社会性が大きくとりあげられた。それに対し、W. C. BagleyやKandel等、教科を強調する伝統または本質派が対立し、賑やかであった。Dewey亡き今日といえども、この論争は解決したわけではない。むしろ、両派はあるいは我城に閉ぢこもり、あるいは相互に交錯した状態において、Wynneが指摘しているように新実験、精神的宗教的自己実現、大古典、または社会的自己実現等の諸説へと進展し、その止む処を知らないありさまを示している。

ところが、第二次世界大戦終了まもなく自然科学者、技術者の大量養成の必要に迫られ、物理学研究委員会（PSSC）によって、教育課程（高等学校）の再編成を余儀なくされている。ここではDeweyの業績を肯定しながらも、即ち、学校は現実の問題と取り組む生活の場だけで、足れりとせず、むしろ人類がかって夢想だにしなかった未知の世界へ突進するために、最大限の知性を駆使して、何物かを発見しようとする特殊な場なのだという。ここでは、人間性よりは学問性、社会性よりは本質的教科性が重要視される。更にこの物理学研究委員会の高等学校課程再編成の仕事は自然科学者及心理学者の手で進められ、教育専門学者、実践家は、しめ出されている。

教育学者であり、実践家である著者は「この本は、今日の教育学に影響している重要なあらゆる論説を歴史的・哲学的・心理学および社会的基盤に立って、充分な、そして綜合的な分析を試みたものである。と同時に、その結果を今日の教育課程、方法、教育行政に応用している」と述べていることによっても、彼の動機は明瞭である。

更に、彼は「教育学の基礎入門書」と副題をつけ、教職課程の重要書即ち入門書であると同時に、深い専門書であることを強く述べている。文育の社会においても教育という作用はある。なんらかの考えに基いて、その作用は進められていることも、否めない。その考えが教育原理である。そして、その原理は、その人により、その場所により、その時により進め方が異なり、また変化していくとともに習慣化即ち伝統となって伝達される。これが学説である。いかなる時代いかなる場所においても、もちいられるその学説は決して単純なものでなく、常に過去の上にたって成立しているのである。いかなる教育学説でも、短い期間に急カーブ的に出来るものでないとともに、現在をつくった、否、影響をもたらした過去を無視することは冒険であり、危険である。世界を通じ、今日程、教育ということが重要視される時代は余りない。Wynne博士のこの新著は、過去の主要教育学説の正確なたなおろし的調べであり、現在との関係を正確に把握し、今後、どうすればよいかという難問題に答える役割をしている力作である。教育を志すもの、教育という仕事にたずさわるものの見のがすことの出来ない明晰な書である。

（一九六四、二、一一）

仏教文学研究会編
仏教文学研究 (一) (二)

田中重太郎

ここにとりあげる「仏教文学研究」(一)(二)は、どちらもB6判ながら、(一)は、三一〇頁、(二)は、三七〇頁、計六八〇頁もあり、執筆者は二十名におよぶ論文集であるから、その論文名を羅列するだけで与へられた紙数に達しさうであるが、その人名と論文名との紹介にとどまっても、十分意義があると考へるので、国文科に入学して来た人人を対象としておほけなき短評を加へてしるしてみる。